

婚約破棄されましたが、
一途な御曹司の
最愛妻になりました

小日向江麻

Ema Kobinata

目次

婚約破棄されましたが、
一途な御曹司の最愛妻になりました

書き下ろし番外編

二号店に灯る希望の光

婚約破棄されましたが、

一途な御曹司の最愛妻になりました

プロローグ

『さようなら。俺のことは探さないでほしい』

世間ではまだ夏の暑さを引きずった初秋の明け方。悠生くんから届いた一通のメッセージは、寝ぼけていた私の思考を一気に覚醒させた。

——なにこれ？ ……状況が呑み込めない。

『探さないで』なんて、まるでベタな置き手紙みたい。いや、厳密には置きメッセージと言わなきゃ。どちらにしても、たやすく彼には会えないような内容が書かれている。家がご近所の幼なじみで、彼氏で、婚約者なのに。

起き抜けにバケツいっぱいの水を浴びせられたような心地で、スマホの画面にきぎ付けになっていると、新しいメッセージが表示される。

『幸せにしなければいけない人ができたんだ。本当に申し訳ない。日和には、俺よりもっと相應ふさわしい男がいる。その人と幸せになってほしい。どうか元気で』

——みたい、じゃなくてズバリ置き手紙だ。じゃなかった、置きメッセージだ。

……って、そんなのどっちでもいい！

「うそでしょ？」

心の中でつぶやいたはずが、無意識に音になっていた。

私はベッドからむくりと起き上がり、慌てて返信を打ち始める。

『冗談だよね？ エイプリルフールはとくに過ぎたよ』

もう五ヶ月以上も前だ。仮に今日が四月一日だとしても、真面目が服を着ているみたいな悠生くんが、こんな強烈なジョークを飛ばしてくるはずがないのは理解している。なのに、訊かすにはいられなかった。

祈るような気持ちで送信したものの、一向に既読マークがつかない。

電話をかけてもいいだろうか。スマホの待ち受けに映る時刻は、午前六時三十二分。

常識的にはアウトな時間だけれど、先に緊急性のある内容を送ってきたのは悠生くんのようなのだから、電話しても許されるような気がする。私は我慢できずに彼のスマホに発信した。

——出ない。仕方がないので一度電話を切って、またかけ直す。

……それでも出ない。

取り込み中なのかもしれない。着信履歴が残っているので、気が付いたらかけ直してくれるだろうか。

「どうか、家はすぐそばなんだし、直接確かめに行くほうが早いのでは？」

「そう思っただけでベッドから下りようとしたけれど——いくら昔から交流のある、気心の知れたご近所さんとはいえ、この時間にインターホンを鳴らすのは厚かましいだろうと思ひ直す。かといって、悠長にしているわけにもいかないのだけど……」

「……そうだ。それなら……」

「ひらめいた私は、メッセージアプリを開いて、とある人物に電話をかけることにした。」

「……もしもし」

「待つこと十秒。いかにも直前まで寝てました、と言いたげな、掠れた低音が応答する。」

「こんな朝早くに本っ当にごめんっ、泰生」

「目の前にいたら拝む勢いで謝った。だけど今、力になってくれそうなのは、悠生くんの弟であり、私にとつて気の置けない友人である彼しか思い浮かばなかったのだ。」

「……ごめんとするのなら、少しは時間選べよ」

「泰生はちよつと不機嫌そうに、ため息交じりに言った。彼が、朝が大の苦手であることは昔からよく知っている。でも。」

「「それも言つてられなくて。悠生くん、家にいる？」」

「兄貴？」

「切羽詰まった口調で訊ねると、ほんの少しだけ考えるような間が空き、「いや」と答える。」

「——昨日は帰ってこなかった。日和と一緒にいるんじゃないのか？」

「私と悠生くんがお付き合ひをしているのは、もちろん周知の事実。いい大人がひと晩家を空けたところで、大事と思わないのは致し方ない。」

「日和？」

「一縷の望みをかけていたものの、あえなく打ち砕かれてしまい、私は言葉を見失った。泰生が心配そうに私の名前を呼ぶ。」

「……悠生くんからメッセージが来たの。『さようなら』って……『探さないで』って」

「え？」

「ねえ泰生。悠生くん、いなくなっちゃったのかも……」

「口に出すと現実になってしまふ気がして、本当は音にしたくなかった。片足で立つような心もとなさを覚えていると、勢いよく起き上がったであろう衣擦れの音が電話越しに聞こえる。」

「……待ってる。支度してすぐそっち行くから」

「え、でも……」

「今日は確か——火曜日。平日だ。会社勤めの彼には出勤の準備があるだろう。私の言葉を遮って、泰生が強い口調で続ける。」

「いいから。そんな泣きそうな声してるヤツ、放っておけるわけないだろ」

「泰生……」

遠慮しつつも心強かった。ひとり暮らしの私は頼れる人がほかにいない。こんな精神状態で悠生くんからの連絡を待ち続けるのは不安で仕方なかった。

「……ごめん。ありがとう」

私は心からのお礼を言うと、彼がいつやってきてもいいように、手早く自身の身支度を済ませる。

——やっぱり、泰生に連絡してみてもよかった。

泰生とは、付き合いが長いこともあって気が合う。口が悪いときもあるけれど、本質的には面倒見がよくて優しい。異性だけど私にとっていちばんの親友だ。泰生のおかげで、ほんの少しは平静を保っていられる。

……それにしても。悠生くんに一体なにがあったっていうの？

さよならなんてうそだよな？

だって私たち、周りにも公認の仲で、結婚の約束までしていたのに……！

だけど……待てど暮らせど、悠生くんからは電話も、メッセージの返信もなかった。

それどころか、その日を境に、彼は私の前から本当に姿を消してしまったのだった——

1

衝撃の朝から約一ヶ月後の夕刻——

「いらつしやいませ」

ディナータイムが始まったばかりの『トラットリア・フォルトゥーナ』。

ドアベルがチリンと鳴り、ブナの木の大きな扉が開いた。仕事着である白いシャツとギヤルソンのエプロンに身を包んだ私——瀬名日和は、そちらを振り返った。そして、扉の向こう側にいるであろうお客さまに声をかける。

「……あ、な〜んだ。泰生かあ」

「なんだとはなんだ」

入ってきたのは見慣れたシルエットだった。思わず本音が漏れると、仕立てのよさそうなダークグレーのスーツにボルドーのネクタイを合わせたスタイリッシュな男性が、凛々しい眉根を寄せる。

古橋泰生。私のご近所さんかつ、同じ年の幼なじみ。中学から大学まで一緒だったこともあり、なんでも話せる親友だ。

「だって、お客さまかと思っただから」

まだオーブン直後ゆえにゲストはゼロ。……だからこそ期待したのに。

不満を表すように口を尖らせると、泰生は仕方がないとばかりに、大げさにため息を吐いてみせた。

「じゃあ今日は客でいい。席に案内してくれよ」

「え、本当っ？ はい、こちらへどうぞ〜」

「ったく、ゲンキなヤツ」

声をワントーン高くして、泰生をカウンターの席に案内をする。呆れた様子のボヤキが聞こえたけれど、気にしない。

ここ『トラットリア・フォルトゥーナ』は、『本場イタリアの料理を誰でも気軽に楽しんで、お客さまに心を尽くす』がモットー。オーナーシェフだった先代——父である瀬名勝寿の遺志を継いで、今は娘の私がオーナーを務めている。私を除くと社員二名にアルバイトが一名の、こぢんまりとしたお店なので、私自身も積極的にホールに出て給仕をする日々だ。

私が二十五歳の若さにして一国一城の主をしているにはわけがある。もともとこのお店は、都心の一等地にあるリストランテでシェフをしていた父が、母と結婚したのを機に独立、開業した経緯がある。

気心知れた仲間と、リストランテよりも親近感のあるお店作りに励んで十数年。父の片腕だった母が交通事故で帰らぬ人となった。私は当時高校生だった。

母を心の支えにしていた父が病気を患ったのはその直後。仕事一筋で責任感の強い父は、自分が力尽きては従業員や娘の私を路頭に迷わせることになる、ギリギリまで投薬治療で様子を見て、厨房に立ち続けた。社員やお客さまのために、現場を離れたくなかったのだと思う。

けれど、そんな父の情熱とは裏腹に、病気の進行は待つてはくれなかった。腹を決めて入院、手術を経たものの病状はよくなり、私が大学三年の秋に母のもとへ旅立ってしまった。

尊敬する大好きな母と父の相次ぐ死。悲しみでどうにかなくなってしまっただったけれど、父が亡くなる間際に残してくれた言葉が、私を奮い立たせてくれた。

『日和……これからはお前が「フォルトゥーナ」を守ってくれ』

——そうだ。父と母が大切にしていたお店を、私が守らなきゃ！

決意した私は就活を取りやめて、それまでアルバイト程度だった『フォルトゥーナ』での勤務時間を大幅に増やし、店の経営者になるべく勉強に勤しんだ。

大学を卒業してからは、うちのシェフの佐木さんやソムリエの奥蘭さんにイタリアンのあれこれを叩き込んでもらい、早五年。振り返れば、全力疾走の日々だった。

「——で、支配人。今日のアラカルトのおすすめは？」

カウンターの座った泰生が、傍らにある黒板に書かれたメニューを一瞥して訊ねる。

「シェフ自らが釣り上げたイカを使った漁師風トマト煮込みはいかがですか？」

支配人、だなんて形式ばった呼び方をされたので、普段よりも丁寧な物言いで訊ね返してみる。彼はおかしそうに笑ってから「いいね」とうなずいた。

「——じゃ、それと、料理に合う赤ワインもよろしく」

「はい。佐木さん、漁師風トマト煮込みと、グラスワインの赤！」

「バーネ！」

カウンターの内側に回り込んでオーダーを入れると、厨房の奥から、料理長の佐木さんの威勢のいい返事が聞こえてきた。「バーネ」とは、イタリア語で『了解』を意味する言葉だ。オーダーを通すとき、彼はいつもそんな風に返事をしてくれる。

「今日は一段と帰りが早いじゃない」

今日のトマト煮込みには「ピノ・ノワールが合うでしょう」と、奥蘭さんがチョイスしてくれた赤ワインがある。私はそれをワイングラスに注ぎ、彼の手前に差し出した。

「急ぎの案件がなかったからね。……これ、いただきよ」

泰生がグラスを持ち上げて、まずは香りを楽しむ。それから軽くグラスを掲げた。

「どうぞ、召し上げれ。……そういうときこそ、友達とご飯に行ったりしたらいいのに」

「急に言っちゃって誰も捉まらないうら」

「またまた。泰生、だったら直前でも行きたいって子はいっぱいいるでしょ」

相変わらず、ワイングラスの似合う端整な顔だ。私は茶化すようにして言った。

泰生はただでさえルックスがいいので、昔から女の子によくモテる。はっきりとした直線的な眉に、存在感のある二重の目、横顔をずっと見つめていたくなる高い鼻梁。年齢を重ねるごとに美しさに磨きがかかっている。清潔感のあるマッシュシヨートのヘアは黒々として艶があり、スーツから覗く手足は長く、細身で引き締まったスタイルによく似合っている。

それに——左目の下にある小さなほくろ。このわずか一ミリ程度の小さな点が、妙に色っぽくてより魅力的な印象を与えるのだから不思議だ。

これだけのイケメンゆえに、中学、高校、大学と、バレンタインにはかなりの数のチョコレットをもらっていたはずだ。

でも女子が彼に群がる理由はほかにもある。成績は常にトップクラス、スポーツ万能で学校連合の体育大会に引っ張りだこだったこともそのひとつだけれど、最たるものは、彼のお家柄。

彼は飲食チェーン最大手のゼノ・ホールディングスの経営一族で、グループ会社であるゼノアグリの専務。将来的にはゼノアグリの責任者を担う立場を約束されている。つ

まり、未来の社長というわけだ。こんな好条件の素敵な男性を、周りの女子が放っておくはずもない。

「否定はしない」

鼻にかける風ではなく、泰生がさらりと認める。この反応を見るに、数多あまたの女子が彼に興味を示し、接近してきているのだろう。さすがは、漫画やドラマの憧れのヒーローを地で行く男だ。

「気になる子とかいないの？　っていうか泰生、ずっと彼女作らないよね。どうして？」
泰生の取り巻きの中には、ずば抜けた美人さんや、天下の古橋家にも勝るとも劣らない家柄のスーパーお嬢さまだっていたはずだ。そういう子たちの中に、いいなと思える女性はいなかったのだろうか。

そもそも、彼女ができたという話を聞いたことがない。きょうだいみたいな間柄の私には照れくさくて話さなただけかもしれないけれど、年齢も年齢だし、そろそろ浮いた話があってもおかしくはないのに。

「さあな」

私が首を傾けても、彼はグラスの中身を涼しい顔で呷わおるだけだ。

「教えてよ。ずっと狙ってる子がいるとか？」

私の言葉に、泰生がぴくりと反応した気がした。グラスを静かにカウンターテーブル

に置いたあと、正面にいる私の顔をじっと見据える。

「だったらどうする？」

探るような、意味深な眼差し。それまでの気さくな雰囲気とは一転して、妙に切実な訊き方をする。私は内心で戸惑っていた。

——なに？　そんなに真剣な顔で見つめて。

普段は距離が近すぎるからついつい忘れてしまっけれど、やっぱり泰生ってカッコいいんだよね。

……そんな顔されると、否応いやおうなしにドキドキしてしまう……

「ど、どうするって……応援するに決まってるよ。私でなにか協力できるなら、したいと思うし」

頭の中でそんなことを考えているとは知られないように、にっこり笑って見せた。幼なじみなのに、異性を意識していると悟られるのは気恥かたじけずかしい。

「……………」

彼はほんの少しの間黙り込むと、諦めた風に小さくため息を吐いた。

「……グラスワイン赤、もうひとつくれる？」

「え、誰か呼ぶの？」

「応援する」と言ったあとだったので、私にまだ見ぬ想い人を紹介するつもりなのだろう

うかと思っただけで、彼はおかしそうに噴き出した。

「違うよ。日和の分」

「私？」

「そう。まだ客いないんだし、少しくらい付き合えよ」

やや乱暴に言っただけで、屈託なく笑う泰生は、いつも通りの彼だった。

「わ、わかった——ありがと」

私はちょっと安心してうなずいた。頭上にある吊り下げ式のグラスホルダーからワイングラスをひとつ取って、泰生に出したのと同じワインを用意する。

「じゃ、改めて乾杯ってことで。いただきますーす」

「ん」

赤ワインの入ったグラスをその場で軽く掲げると、泰生も同じ動作で応えてくれる。さっそく、ごちそうしてもらったワインを一口呑んだ。

「あのさ、話戻るけど……お店、頻繁に覗きに来なくて大丈夫だよ」

鼻の奥に抜ける甘酸っぱい香りを感じながら、私が切り出す。

「私はこの通り元気だし、お店も回さなきゃいけないし。落ち込んでる暇なんてないから、平気だよ。私のこと、心配してくれてるんでしょ？」

泰生は一ヶ月ほど前にある出来事があってから、仕事の帰りに頻繁にこの店に顔を出

してくれるようになった。立場上、彼も忙しいのはわかっているのですが、その気遣いをうれしいと思うのと同時に、負担をかけているだろうと申し訳なく思っていた。

私を見つめる彼の瞳が暗く翳る。

「……心配するなってほうが無理あるだろ。婚約者がいきなり蒸発したら、誰だって正気じゃられないに決まってる」

一ヶ月前——忘れもしない九月十九日の早朝。私の婚約者であり、泰生の兄である二歳年上の悠生くんが、一方的なメッセージを残して行方不明になった。

最初はなにがなんだかわからなくて、ただただ混乱した。仕事は順調だったと聞くし、堅実な人だったので金銭面でのトラブルも考えづらい。いなくならなければならぬ理由なんて見当たらなかった。

ご家族のほうでも警察に届け出をしたものの、自宅には私に届いたものと同じような置き手紙があり、事件性は低く自らの意思による失踪と結論付けられた。以来警察は動いていない。

彼の居場所を突き止めることはおろか、足取りさえもまったくわかっておらず、関係する誰とも連絡は途絶えている。その段階になってようやく、私は悠生くんが強い意思をもって消息を絶ったのだと理解することができた。

悠生くん——幼いころからずっと一緒に、母や父を亡くしたときも私を支えて励まし

てくれた人。

優しくして真面目。男性にしては繊細で、ちょっと不器用なところも含めて、私には魅力的に映っていたし、今でも好きだ。

改めて、彼から最後に送られてきたメッセージを見る。そこにはやはり『幸せにしなければいけない人ができた』と書かれていた。

付き合ってから五年。結婚まで約束していた私よりも幸せにすべき人がいる、ということに驚いたし、悲しかった。

……知らなかった。悠生くんは、私のほかに好きな人がいたなんて。彼は私の未来よりも、その人を選んだということだ。一途で義理堅い彼の性格を思うと、うそみたいな話だ。

とはいえ、一概に彼を責めることもできなかった。二年前から「結婚しよう」とプロポーズし続けてくれた悠生くんを、自分の都合で待たせていたのは私だ。身を固めることに抵抗があったわけではないけれど、『フォルトウーナ』の経営者としての下地ができるまでは、それ以外のことを考えたくなかった。

悠生くんは私のおがままを聞き入れ、「日和のいいタイミングまで待つよ」と言ってくれた。その優しさに甘えずぎてしまったのかもしれない。

この二年間のどこかで私が「そろそろ結婚したい」と訴えていけば、彼を引き止めら

れたのだろうか。

……なんて、もうそのころにはとっくに彼の心は離れていたのかもしれないけど。

「——兄貴のヤツ、一体なに考えてんだよ……」

泰生がさつきよりも深いため息を吐いてから、苛立った様子で後頭部をぐしゃぐしゃと掻いた。

悠生くんがいなくなったことで、もっとも複雑な思いを抱えているのは、弟の泰生であることには間違いないだろう。

ゼノ・ホールディングスの傘下にはふたつの会社がある。全国にファミリールストラなどの飲食チェーンを展開するゼノフーズと、ゼノフーズの店舗で提供する野菜を栽培するゼノアグリ。年商や事業所の数を見ても、ホールディングスの収益により大きな影響を及ぼしているのはゼノフーズだ。

現在ホールディングスの代表は泰生のお父さんである唯章氏。ゼノフーズとゼノアグリの代表には、唯章氏のふたりの弟さんが就いているけれど、早い段階での世代交代を考えているらしい。

唯章氏としては、長男の悠生くんはゼノフーズ、次男の泰生にゼノアグリの舵を取ってもらおうという意向で、彼らをそれぞれの会社の専務にして、その準備を進めていた。しかし、悠生くんが突然姿を消したことで計画が狂ってしまったらしい。

跡取りとしての責任や、親公認の婚約者となっていた私に対する責任を放り出した悠生くんに対し、唯章氏は「二度と家の敷居を跨がせない」と怒りを露にした上で、ゼノフーズを泰生に任せることに決めたという。泰生にとっては、いきなり重圧のしかかってきた形だ。私には多くを語らないけれど、兄弟仲がよかったこともあり、きつと内心は穏やかでないはずだ。

「ほかに好きな人がいたなら、そう言ってくればよかったのに。……そしたら、時間がかかったかもしれないけど、受け入れられたのにな」

私の知っている悠生くんは、無責任でも自分勝手でもない。むしろそれとは対極にいるような人。だからこの決断の裏には並々ならぬ葛藤があったと思いたいけれど——残された私たちは、彼の最後のメッセージから彼の気持ちを推測することしかできない。冷静になった今、彼の失踪の理由が『好きな人を幸せにすること』だけなのだとしたら、そんなことをする必要はなかったのではないか、と思ったりもする。

私だって、心変わりしてしまったのだと悠生くんから正直に伝えてもらえれば、人の気持ち無理強いはできないのだし、どうにか彼を忘れようと努力しただろう。……でも。「——悠生くんは真面目すぎるから、私にはつきり言えなかったのかな」

私は独り言のように付け足した。

悠生くんは自分が傷つくより、相手を傷つけるほうが怖いと思うタイプだ。五年も付

き合って結婚まで約束した私に別れを告げたときのリアクションを想像して、苦しんでいたのだとしたら——胸が締め付けられるように痛くなる。

「本当に真面目で優しいヤツは、急に消えたりしないだろう」

つぶやくように、泰生が悪態をつく。私は敢えて明るく笑った。

「かもしれないけど、悠生くんらしいな、とは思うよ」

悠生くんも泰生は、兄弟だけど性格はあまり似ていない。泰生は自己主張がはっきりしていて、なにごととも白黒つけたがる節があるけれど、悠生くんはその逆。相手を傷つけないように、婉曲で柔らかい物言いをする傾向がある。

それぞれのよさがあるから、一概にどちらがいいとは言えないけれど、今回の件に限って言えば、思い詰めずに「好きな人ができた」とストレートに打ち明けてほしかったのが本音だ。

「……今ごろ、どこでなにしてるんだらうね」

私はワイングラスを軽く回しながら、悠生くんのことを思った。

ご近所だから、毎日のように——いかにお互い忙しくとも週に一度は顔を見かける環境だった。付き合い始めてからはなおさら。こんなに長い間、悠生くんに会えないのは初めてかもしれない。

きつと、『幸せにしなきゃいけない人』と一緒にいるのだらうけれど……元気にして

いるのだろうか。泰生の話では、財布やカードの類はすべて持って出ていったことだから、生活には困っていないと信じていた。

『日和の誕生日は必ず空けるから、期待してね』

悠生くんがいなくなるほんの二週間前。そのころの悠生くんは忙しそうで、週に一度、私と一緒に食事をする時間すら取れないようだった。なによりも仕事を優先したい気持ちにはよくわかるので、私が『頑張ってるね』とメッセージを送ると、悠生くんはそんな風に返信してくれた。

十一月二日。悠生くんと過ごすはずだった誕生日が、もうすぐやってくる。

大学生アルバイトの小淵こぶちくんに一日シフトに入ってもらって、私はお休みをもらおうつもりだったけれど、その必要もなさそうだった。それに、今は働いていたほうが気が楽なので、予定を変えてもいいのかも。

ひとりの時間があると、やっぱり悠生くんのことを考えてしまうし――

「お待ちせしました、漁師風トマト煮込みです！」

ワイングラスの三分の一程度を満たす赤紫色の表面に、彼氏――いや、元カレの顔を映していると、向かい合う私と泰生の間に白い深皿が割って入った。トマトとガーリックの食欲をそそる香りが、湯気とともにぶんと漂う。

「うまそうですね、佐木さん」

泰生が顔を上げ、その深皿を持ってきた人物に呼びかける。コックスーツに身を包んだその男性の年齢は五十代前半くらいで、肩までの黒髪をひとつに束ねており、体格がよくてコワモテ。そんな見た目に反し、繊細な味覚と色彩センスを持つ佐木さんは、『フォルトゥーナ』の料理長だ。

うちの父がかつて在籍していた都心のリストランテで、後輩シェフとして働いていた佐木さん。父がこの店を開店すると聞き『ぜひ雇ってください』と頭を下げたのだという。父は「リストランテよりも待遇は悪くなるし、シェフとしてのステップアップも見込めないで残ったほうがいい」と説得したようだけど、佐木さんは折れなかった。佐木さんにとっては、シェフとしての待遇や名誉よりも、うちの父と一緒に仕事をするほうが重要だったのだとか。要は、父の人間性に惹かれてついてきてくれたのだ。

「さっき味見させてもらったけど、おいしかったよ！」

釣り好きの佐木さんは、朝に車を走らせて海に行き、ときには船で沖まで出て目当ての魚介を釣っているようだ。釣りも料理の腕前もスペシャルな彼の特別メニューは、いつもハズレがない。

「泰生くんのオーダーってことで、バタートースト付けといたよ」

「うれしいな。ありがとうございます」

深皿の周囲を囲うように、スライスしたバゲットで作ったバタートーストが添えられ

ている。表面に塗ったバターがこんがりときつね色に彩られ、仕事にもかかわらずお腹の虫が鳴ってしまいそうだ。

幼なじみの泰生と悠生くんは幼いころからこの店に出入りしていたので、佐木さんとも親戚のおじさんと子どものような関係だ。彼らが訪れるたびにこんな風に世話を焼いてくれる。

佐木さんが厨房に戻ったそのとき、店のドアベルがチリンと鳴った。

「——あら、泰生くん、いらっしやい」

扉に視線を送ると、買い物袋を抱えた奥蘭さんが帰ってきたところだった。カウンターに泰生の姿を見つけると、うれしそうに空いたほうの手を振る。

「お邪魔します。ペアリングのワイン、相性抜群でおいしいです」

「気に入ってもらえてよかった。そのピノ・ノワールってブドウの品種はね、トマトソース全般と合うから、パスタやピザにもおすすめよ」

奥蘭さんは買い物袋を近くの座席に置き、泰生のそばにやってきた。自身のペアリングを褒められ、胸の前に両手を合わせてよろこんでいる。

奥蘭さんは五十歳前後だけど、見た目がもつと若く見えるのは、雰囲気合ったナチュラルメイクと茶色のボブヘアのせいだろうか。白いシャツに黒いパンツというシンプルな格好だからこそ、細身であることがよくわかる。

彼女もまた、父のリストランテ時代の同僚だった。当時はソムリエの資格を取るための勉強をしながらホールの仕事をしていたらしいけれど、父が独立する噂を耳にして、佐木さん同様「雇ってください」と熱望したと聞く。ソムリエになったのは『フォルトゥーナ』に籍を移してかららしい。

彼女の提案するペアリングのおかげで、庶民的な店ながら、冠婚葬祭などのかしこまった場での宴うたげに利用してくださるお客さまもいて、とても助かっている。

「へえ、勉強になるなあ」

自身の会社で飲食を扱っている泰生は、自身が食えることが好きなのもあり、興味をそそられたようだ。感心したようにうなずく。

「会社のメニューでも真似していいよ。イタリアンの居酒屋チェーン、ゼノフーズで持ってたでしょ？」

「じゃあアイデアもらっときます」

奥蘭さんと泰生がにこやかに笑っていると、厨房のほうから「あつ！」と佐木さんの叫び声が聞こえた。それから、彼が再びカウンターに出てくる。

「律子、言い忘れてたけどカッターがないから頼む」

律子とは、奥蘭さんの名前だ。佐木さんがバツが悪そうに顔を掻いて言うのと、奥蘭さんが信じられないという風に目を剥いた。

「えー！ しゅうちゃん、そういうの買い物行く前に言つてよ。オレンジピール切らしてたんじゃなかったっけ……。だいたい、仕込むのに時間かかるのに」

しゅうちゃん、という愛称は、佐木さんの名前である修しゅう一いちから来ている。「どうせひと晩かかるんだから、今夜は間に合わないだろ」

カッターとは、チーズクリームにナッツやドライフルーツなどを合わせたイタリアのアイスクリーム。奥蘭さんはホールや調理補助もこなしてくれていて、ドルチェの一部は彼女が仕込んでいる。カッターもそのうちのひとつだ。

数時間タイムングが違ったところで結果は変わらない。そう言いたげな佐木さんに、奥蘭さんが「あのねえ」と反論する。

「——だとしても、買い物は行つてこなきゃいけないじゃない。私にまたスパーまで往復させる気？」

「俺は厨房から出るわけにいかないんだから仕方ないだろ」

「仕方ないだろつて……あなたつていつもそうつ」

テンポのいいかけ合いの途中、泰生がふたりを眺めながらふつと笑う。

「なにがおかしいの、泰生くん？」

奥蘭さんがちよつと不服そうに泰生を一瞥した。すると泰生は、悪気はなかったとばかりに顔の前で拝むような仕草をする。

「あ、いえ。おふたりとも、相変わらずこのワインと料理みたいに相性抜群だなつて。そうやって仲良ささうなところを見ると、『元』夫婦つて感じがしないな」

「だね」

私も同感なので相槌あいづちを打った。口ゲンカしつつも、彼らの間には、長年連れ添った夫婦特有のリラックスした空気感がある。

実は奥蘭さんと佐木さんは十年ほど前まで夫婦だったのだ。『フォルトウーナ』の経営が安定し始めたときに結婚してお店でパーティーをしたのを、子どものころのことだだが覚えてる。

離婚理由は『家でも仕事の話になつて気が休まらないから』。お互いに仕事人間なので、一緒にいるとお店の話をしてしまうらしい。ふたりともお店を辞める気はなかったから、それなら私生活で距離を置きましょうということにしようだ。

離婚後もふたりに別のパートナーができたとは聞かないし、定休日にはふたりで食事していることもある。私から見ればいつも仲良しなので、復縁したらいいのにと勝手に思っている。

「相性抜群なら離婚しないで済んだわよ」

奥蘭さんは照れ隠しなのか皮肉っぽくそう言つたけれど、それを自身で笑い飛ばして続ける。

「つていうのは冗談として。……まあ別に、嫌いで離婚したわけじゃないからね。でしょ？」

彼女が佐木さんに振ると、彼もいつもの鋭い目を優しく細めて、豪快に笑う。

「そうそう。俺たちは今くらいに適度な距離感があったほうが上手く行くんだよな」

「これで四六時中一緒だったら、私もっと突っかかって大ゲンカになつてと思うわ」

奥蘭さんがいたずらっぽく言うのと、みんながおかしそうに笑った。

「——ただ、先代と伽奈子かなぎこさんは別格だ。あのふたりはいつも一緒だったけど、ケンカしてるところは一度も見たことなかった」

佐木さんがちょっと遠くを見つめて、懐かしそうにつぶやく。伽奈子というのは、私の母の名だ。

「ですね。母は控えめで父の決めたことに反論しませんでしたし、父もそんな母の意見をできるだけ汲もうと、丁寧言葉を交わしていた記憶があります」

両親は常にお互いを想い合っており、穏やかだった。私もふたりが言い合いをしている様子は記憶にない。思春期、傍はたから見ると少し恥ずかしくなるくらいに仲睦まじかったけれど、今となつては自慢の両親だ。

「瀬名さんも伽奈子さんも人柄がいいから、お客さまも自然とそういう方々が集まってくださるんですね。本当、素敵なご夫婦だったわ」

今度は奥蘭さんがまぶたを閉じて言う。きっと父と母の姿を思い浮かべているのだろう。

「……そう言っていただけで、両親もよろこんでいると思います」

父と母とともに、この店をずっと支えてきてくれた佐木さんと奥蘭さん。大学在学中の私が、ふたりに「この店の経営者になる」と決めたことを話したとき、いやな顔ひとつせずに応援してくれた。

父が亡くなったことで離れてしまったお客さまもいるけれど、それでもなんとか黒字をキープできてきているのは、彼らがそばで支えてくれていたから。このふたりには、感謝の念が絶えない。

——そして。感謝しなければいけない人はもうひとり、私の目の前にもいた。カウンターで、私たちの昔話に耳を傾けている彼。

泰生とはもともとなんでも言い合える友達だったけれど、悠生くんがいなくなつてからはずっと支えてもらいっぱなしだ。最初のころは現実を受け止めきれない私に毎晩のように電話をくれたし、少し落ち着いてからはこうして様子を見に来てくれる。

軽口を叩きつつも、その実は私のことを深く心配してくれているのがわかった。私は本当にいい親友を持ったな、と思う。

彼のほうからしてみれば、自分の兄の不義理をフォローしているだけなのかもしれないけれど。それでも泰生が話し相手になってくれることで、地の果てまで落ち込んだ気

持ちが楽になったし、つらくとも少しずつ現実を受け入れて前を向かなくてはいけないという思いにさせられた。

そのとき、またドアベルが鳴った。今度は正真正銘、お客さまだ。ふたりとも初めて見るお顔なので、新規の方だろう。

「いらつしやいませ」

私と奥蘭さんの声がユニゾンし、佐木さんは厨房に戻る。私がカウンターの外に出て奥蘭さんの置いた買い物袋を裏へ引っ込めているうちに、奥蘭さんがお客さまを席へ案内する。

「そうだ日和。二週間後の夜、空いてる？」

カウンターに戻った私に、思い出したように泰生が訊ねた。

「二週間後？　って、いつ？」

「十一月二日」

——あ。……私の、二十六回目の誕生日。

「……えっと、昼か夜どっちかなら……」

「あらあら、その日は丸一日お休みのはずじゃなかったですか、日和さん？」

私が少し躊躇しながら答えると、早々とオーダーを取り終わった奥蘭さんが戻ってきて、口をはさんでくる。お客さまと会話をしつつ、私たちの会話にも聞き耳を立ててい

たらしい。

「あ、でもそれは——」

悠生くんとデートするために空けていただけで。彼との予定がなくなつたなら、どちらかだけでも働こうという気持ちになっていた。でも。

「泰生くん。日和さんは一日フリーなのでよろしくお願いします」

「えっ、奥蘭さんっ？」

奥蘭さんがかしまった所作で、泰生に頭を下げた。その意図がわからなくて混乱する。「平日ですし、昼も夜もブッチが入ってるんで心配しなくて大丈夫ですよ。お任せください」

ブッチ——小淵くんの名前を出した奥蘭さんは、泰生の肩をつんと突きながら、いたずらっぽく小首を傾げる。

「——泰生くんだって、そのほうがいいものね？」

「っ……奥蘭さん」

泰生が慌てた風に奥蘭さんの名前を呼んだ。彼にしては珍しく、心なしか少し照れているように見える。……なんだろう？

「てわけで、日和さんは気にせずお出かけしてください。せっかくなので、泰生くんに豪華なランチやディナーでもごちそうになったらどうです？」

奥蘭さんは小声でそう言うと、厨房のほうにくるりと方向転換して、声を張り上げる。「——オーダー入ります、グラスシャンパンが二つと前菜の盛り合わせ、漁師風トマト煮込み」

「ベーネ！」

佐木さんが歌うように答えるのを聞き届けると、彼女は仕事モードに入ったと言わんばかりに、黙々とシャンパンの準備を始めた。

「……まあ、なんだ。奥蘭さんもあ言ってくれてるし、兄貴の罪滅ぼしってわけじゃないけど、日和さえよければ出かけよう。一日空いてるなら、その日の予定は俺に組ませてもらえる？」

泰生はほんのちよつとだけ気まずそうに視線をさまよわせたけれど、小さくかぶりを振り、反応を窺うように私の顔を覗き込む。

——うーん、どうしよう。

私と悠生くんが婚約していたことは、お店で働くみんなも知っている。彼が姿を消した直後は彼らにも心配をかけてしまったけれど、極力仕事に影響させたくはなかったの、お店ではできる限り普段通りに振る舞っているつもりだ。みんなも私の思いを汲んでくれたのか、そのことについては触れず、温かく見守ってくれているのがありがたい。そんな奥蘭さんが妙に私を休ませたがるのは、たまにはお店のことを忘れてリフレッ

シュしたほうがいいと、遠回しに元気づけようとしてくれるからなのかもしれない。

お店を離れていると余計なことを考えてしまいそうで、そっちも心配なんだけど……

……ううん。でもせっつかくだし、やっぱり行こうか。

泰生もまた、私を元気づけようとしてくれるのだろう。罪滅ぼしなんて言うけれど、泰生はちっとも悪くないし私も彼を責めるつもりはない。だから責任感の強い彼に甘えずぎてはいけないと自戒しつつ、誘われたのは素直にうれしかった。

今年の誕生日は、久しぶりにひとりで過ごすことになるだろうと思っていたから、それだけで気持ちが明るくなる。仲のいい泰生が相手ならなおのこと。

「う、うん……じゃあ、お願いします」

熟考の末に私がうなずくと、泰生の表情に安堵の色が浮かぶ。

「楽しみにしてる」

「……私も」

——泰生とふたりで出かけるなんて、いつ以来だろう。

遥か遠い記憶に想いを馳せながら、私は彼が食事を終えるまでの間、他愛のない会話を楽しんだのだった。



——二週間後。私の誕生日まではあつと言う間だった。

待ち合わせは午前十一時に『フォルトウーナ』の前。お店の二階が、私の住居になっているからだ。

「たまには悪くないじゃん、そういう格好も」

「……そ、そう?」

私は少し照れながら首を傾げる。「日和が持っている中で、いちばんきちんとしている服で」という指定を受けていたので、ベージュのニットワンピースにブラウンのジャケットと、黒のショートブーツを合わせた。カジュアルめな格好が多い私にとっては大人っぽい組み合わせだ。

「うん。似合ってる」

「そ、それはどうも」

気恥ずかしくて視線を逸らしながらお礼を言った。

彼の装いは、黒いジャケットに白いバンドカラーシャツ、ダークグレーのスキニーパンツ。足元は革靴。普段のスーツ姿と似ているようで、ほどよく肩の力が抜けたフアッ

シヨンド。彼は昔からなにを着てもさまになって羨ましい。悠生くんも、「泰生は得だよね」とよく褒めていたっけ。

泰生の車で向かった先は都心にある、若者に人気のおしゃれなカフェだ。都会的なビルが立ち並ぶ中に突然現れる赤い屋根のお店は、鉄板で焼くふわふわのパンケーキが人気で、テレビやSNSで話題になったので知っている。

普段は食いしん坊の私だけど、「昼は軽めにしておいて」と言う泰生に従い、リコッタチーズのパンケーキを三段にしたいところ、二段で我慢した。それにミルクたっぷりのカフェラテ。

泰生はブラックコーヒーと、フレッシュアップのパンケーキを二段。そうだった。彼は兄と違って甘党なのだ。

男性とお茶をされていて、一緒に甘いものを食べてくれるのが新鮮で、それだけで楽しい。「かわいいし、おいしい」とパンケーキの感想を言い合った。

食後に連れていってくれたのはアクアリウム。カフェからほど近いそこは、光と音の演出が巧みで、カップルのデートスポットとして定評がある。私も興味があったので悠生くんを誘ったことがあったけれど、人混みが苦手な彼はあまり乗り気ではなかったから、残念に思いつつも諦めていた。

そういう話を、泰生に直接伝えたことはないはずなのだけど……思いがけず、来られ

てよかった。

訪れるお客さんのいちばんの目当てだというイルカショーを見たあと、ひとつひとつの水槽をきっちり見て回る。その途中で少し休憩しようという流れになり、私たちは建物内にあるカフェスペースに立ち寄ることにした。

ライトの演出を際立たせるために周囲は薄暗く、丸テーブルと椅子の白さがやけに鮮やかに映る。

「カップルが多いけど、家族連れも多いね」

歩き回って少し暑いと感じたので、背もたれにジャケットをかけて椅子に座った。それから、クラゲ模様のプラスチックに入ったホットレモネードを片手に、きよるきよると辺りを見回してみる。

「子どもって海の生き物が好きみたいだな。さっきのイルカショーも、前列はほとんど小さい子だったし」

テーブルの向かい側に座る泰生は、ここでもブラックコーヒーをチョイス。手の中のカップには、エイが描かれている。

「やっぱりショーは迫力あったね。イルカも当然かわいかったけど、音楽とライトの使い方が素敵で、つい見入っちゃったな」

先刻のショーを思い出し、私はいつになくはしゃいで言った。

出かけるのは久しぶりだったし、家にいるとなんだかんだ悠生くんのことを考えてしまうから、一時でもそれを忘れて心から笑えたのは、泰生のおかげだろう。

「——ありがとね、泰生。ここ来てみたかったから、連れてきてもらえてうれしい」「ならよかった」

泰生が私を見つめて穏やかに微笑む。

兄弟だから、彼の面差しは悠生くんに似ている。悠生くんも、よくそうやって目を細めて私を見つめてくれた。左目の下のほくろが、彼がかつての恋人ではないと認識させてくれる。

当の本人は今ごろ、私ではない誰かに、その微笑を向けているのだろうか——

「彼女さんのジャケット落ちてますよ」
ついつい、消えてしまった恋人のことをまた考えていると、後ろの席の女性がそう話しかけてきた。

「あ——ありがとうございます」

一瞬ぼかんとしてしまっただけで、すぐに私のことを言っているのだと気が付いた。慌てて振り返り、教えてくれた女性に頭を下げる。それから、気付かぬ間に床に落ちていたジャケットを拾って、椅子の背もたれにかけ直した。

——彼女さん、だって。周りからはそう見えてるのか。まあ、私たちくらいの年の男

女がふたりでいれば、そう思われても仕方がないのかもしれないけど……。自分ではあまり考えたことがなかったので、少しドキドキする。

今さらになって、泰生が異性であることを思い知らされたような気がした。と同時に、彼の運転する車の助手席に乗ったことや、いかにもカップルが訪れそうな場所を回っていること、そもそもこんな風に丸一日一緒にいる予定でさえも、特別感があるように思えてくる。

——って、違う違う。泰生はただの幼なじみなんだから、意識する必要なんてないのに。きつと、泰生の周りには私と代わりたいたいと思っている女性はたくさんいるのだろう。

けれど、私と彼に限ってそんな展開になるはずがない。

「——そ、そう。今さらだけど、今日仕事は？ 大丈夫だったの？」

……わかつているのに、なんだろう、この気持ちは。胸の裏側がくすぐったいような心地に無視を決め込み、話題を変えた。

「スケジュールはある程度自分で調整できるから。なにも問題ないよ」

「そう。それならいいんだけど」

私が内心で動揺しているなんて露ほども知らない様子で、泰生は涼しげに答えた。

彼みたいに会社勤めをしている人は、平日のお休みを取るのは大変なのではと思ったりのんだけど、普通の社員とは立場が違うのだから愚問だったか。

「それと——わざわざ服装の指定をしてきたのはどうして？」

泰生はいつも相手の服装には無頓着な印象があるから、密かに引っかかっていた。私が続けて訊ねると、彼はコーヒーをひと口飲んでからいたずらっぽく笑う。

「ま、すぐにわかるよ」

「え？」

訊き返してみたけれど、それ以上は答えてくれなかった。まるで、なにが起こるかはお楽しみ、とでも言うように。

「少しのんびりしたら、残りを見て回ろう。日和が見たがってたアザラシ、この先にいるみたいだし」

「あっ、そうだったね。楽しみ！」

——そうそう、アザラシ。丸いフォルムがかわいらしいのに、水に潜ると意外に素早かったりする。動物園では見たことがあるけれど、館内の案内図でここにもいると知り、楽しみにしていたのだ。

私たちはつかの間の休憩を挟んで、順路に戻った。

心待ちにしていたアザラシは、悲しいことに展示のガラスが曇っていてあまりよく見えなかったけれど、それを泰生と笑い合って、結果楽しかったのでよしとする。

アクアリウムを出ると、さらに車で移動した。途中、イチヨウ並木がトンネルみたいになっている場所を通り、視界いっぱいには広がる鮮やかな黄色が美しく、夢中で写真を撮った。

夕刻、私たちの乗った車は海沿いにあるフレンチレストランに到着した。都会の喧騒から離れ、ポツンと一軒だけそこにあるような白く四角い建物。車を駐車場に停め、石の階段を上がると、厳かな門が現れる。そこをくぐって中に入ると、給仕服に身を包んだスタッフが、折り目正しく挨拶をしてくれる。

ダウンライトの落ち着いた照明が辺りを照らす店内を、私たちは窓際のソファ席に案内された。

「すごい。こんな素敵なお店、来ちゃってよかったの？」

スタッフがワインリストを取りに行ったのを見計らい、泰生に耳打ちする。彼は、恐縮する私を見ておかしそうに笑ったあと、大きくうなずいた。

「もちろん。そのために予約したんだから」

「緊張しちゃう。こういうレストランに来るの、久しぶりだから」

彼が「きちんとした服」と指定したのは、最後にここで食事をするためだったのだ。

私は左胸に手を当てながら言った。同じ飲食店を営む身ではあれど、雰囲気の違いがさがる。

「兄貴が連れてきたりしなかったの？」

「うん……私、意外と気後れしちゃうから、いつももう少しラフなお店にしていた」
格式の高そうなお店は緊張が先に立ってしまう。だから普段のデートでは、気軽に入る庶民的なお店を選んでもらっていた。

「——あつ、でもこういうところも好きだよ！ 勉強になるし、やっぱりお料理がおいしいところが多いから」

私は付け足すように言った。雰囲気には慣れないだけで、決して苦手なわけじゃない。

ただ、泰生がこういう雰囲気のお店を選んできたのは意外だった。直接言葉にはされていないけれど、今日が私の誕生日であるのは知っているはずだから、そのお祝いとしてここを選んでくれたのだろうか。もしそうなら、その気持ちがあるにしろありがたい。

「泰生は？ こういうところ、女の子と来たりする？」

「だから相手がいないって。この間も言ったろ」

「じゃ、泰生も久しぶりなんだ。なににごめんね、相手が私で」

彼がその気になれば、好みなかわいい子を誘うくらい訳ないだろうに。失恋した幼なじみのフォローなんてさせてしまって、申し訳ない。

「いいんだよ。俺は日和と来たかったんだから」

あははと笑いながら冗談っぽく言った私に対して、泰生は間髪を容れず、いやに真面

目なトーンでそう答えた。

「……あ、ありがと」

こちらに向けられた真摯な瞳に、また心臓がどきんと高鳴る。

今日の私はどうかしている。そこに深い意味はないとわかっていても、私の目には妙に泰生が優しく、頼りがいのある男性に映ってしまう。

実際、友人としての彼は間違いなくそうなのだけども——今日に限っては、そういう意味合いではない。

自分で自分の感情に戸惑っているうちに、スタッフがワインリストを持ってきてくれた。すかさず泰生が「帰りは運転代行を頼んでから、ワインを選んで。俺より詳しいだろ」と言ってくれたので、変な間ができずに済んだ。

詳しいというほどではないにしろ、奥菌さんから日々レクチャーを受けているから、全く知らない人よりはわかっているのかもしれない。食前酒も兼ねてシャンパンのリュットと、メインの肉料理に合わせて赤のメルローを選んでみた。気に入ってくれるといいのだけど。

ほどなくして、スタッフが持ってきた細長いグラスに、華やかな薄黄色の液体が満たされた。軽くグラスを掲げて乾杯してひと口嚙下すると、喉奥に爽やかで心地いい刺激がほとばしる。おいしい。

追いかけるように前菜がやってきた。オイルサーディンとラディッシュのサラダ、馬肉のタルタル。栗とさつまいものムース。色合いが美しく、それだけで食欲がそざられる。

「店はどう？ 順調？」

「おかげさまでね。ほとんど佐木さんと奥菌さんのおかげだけども」

三種それぞれを口に運びつつ、泰生の問いにうなずく。やっぱりどれもおいしい。特にムースは秋らしさが前面に出ているし、佐木さんに相談してうちのお店でも出してみたいくらいだ。

「いい人たちだよな。お店のこと、すごく大事にしてくれているのがわかるし」

泰生も顔を綻はせているところを見ると、料理を気に入ったのだろう。

「うん。私は周りの人に恵まれてると思う」

父と一緒に仕事をしていたのが、彼らで本当によかった。たまに店の手伝いをする程度の大学生だった私が、こうして曲がりなりにも店の経営者になれたのは、ふたりの協力あってこそだ。本当なら、父が亡くなった時点で辞められてもおかしくはなかったのに。「泰生のほうこそ、仕事はどうなの？ 今はずっとゼノフーズなんでしょ？」

「アグリとは内容も勝手も違うけど、食らいついてる。店やらメニューやら、覚えることがいっぱいあって感じ」

「お店もメニューも多種多様だもんね。……大変そう」

ゼノフーズが展開する店舗は、ファミリーレストラン、ファーストフード、居酒屋、カフェなどなど多岐にわたる。そのすべてを把握するのは骨が折れそうだ。それぞれのメニューまで含めたらなおのこと。

「フーズはこれから泰生が継いでいくとして、アグリはどうするの？」

「父親の弟に娘がひとりいるんだけど——つまり、俺の従妹いとこな。役員連中の話では、その子にしようかって話が出てるらしい。でもなんか揉めてるよ。考え方が古いから、やっぱ男じゃなきゃって決ってるみたいで」

「ああ、なるほど……」

一族経営のゼノホールディングスにおいて、跡取りは長子の長男から順番にとというのが暗黙の了解らしい。古橋家の長男である唯章氏には、悠生くんとと泰生というふたりの息子がいて、本来ならそのふたりがフーズとアグリのの次期社長の座に納まるはずだった。それが、悠生くんが離脱した今、泰生がフーズに、アグリには弟さんの長女が繰り上がったというわけか。女性である点を懸念されているみたいだけど。

「長子の長男だとか、性別だとか、そういう時代じゃないんだけどな」

泰生がため息とともに吐き出した言葉に深く同意する。私は大きくうなずいた。

よそのお家のことだからそれぞれの考え方があっては思いつつ、私も、長子の長男だ

からと盲目的に世襲させるとか、女性だから男性に劣るとか、そういう価値観は今の時代に合っていないのではと考えたりする。

「泰生のときにはルールを変えちゃえば？ 完全実力主義にするとか」

「それもいいな。考えておく」

正義感の強い泰生なら、会社をよりよくするために多少の苦労は厭いとわないだろう。昔から有言実行できる人なので、大企業の体制へのテコ入れなんて難しい案件でも実現しそうな気がする。御曹司なのに客観的な視点を持っているのが、彼のすごいところだ。

「——そうだ。俺、もし自分が経営に直接関わるようになったら、変えようと思ってるところがすでにひとつあるんだ」

「へえ、それはなに？」

泰生の瞳がきらりと輝いた。自分の興味がそえられるものの話をするとき、彼はよくこんな目をする。

「うちの会社、とにかく回転率を重視してるんだ。店の性質上、価格帯が低いから、その分客を入れないと利益が上がらないのはわかってるんだけど」

「うん」

「たまに日和の店に行くとき、すごく落ち着くし、また来たいって気持ちになる。料理や酒がおいしいのも理由のひとつなんだけど、いちばんはホスピタリティだって」

泰生は思い出すように軽く臉を閉じた。そして、ふっと小さく笑う。

「日和の店の人たちはみんなここにこしてて、気持ち華やぐんだ。それに客に対して自然に歓待^{かんたい}してくれるのがすごい。自分の他愛ない話を覚えてくれていたりうれしいし、ちよどもう一品欲しいところで勧めてくれるとか、客のさりげない会話を聞いて記念日だつてわかつたら、ドルチェのプレートにメッセージを書くとか……素直にまた来ようつて思えるよね」

「わかつてくれてうれしい。……それ、お父さんがいちばん大切にしてたことだから」
私は心に羽が生えたみたいな快さを覚え、感激して言った。

父がわざわざリストランテを辞めて「フォルトゥーナ」を作った理由はそこにある。気取らないけど心は尽くす。「お店は料理を提供するだけじゃなくて、おもてなしをする場なんだよ」と、父は口癖のように話していたから。

うれしいけれど、正直、泰生がそんな風に言ってくれたのは意外だった。

というのも、以前、兄の悠生くんに父のポリシーであるおもてなしの話をしたとき、「素敵な心がけだとは思うけど、会話で客を引き留めてしまうと店の回転率が下がるから、俺ならそうはしない」とはっきり言われてしまったからだ。

悠生くんの意見は、経営者としては正しいのかもしれない。売り上げを第一に考えたらそうするべきなのもわかっている。でも、同じ経営者だからこそ、根っこにある大切なものをわかり合えないような気がして——父や私の思いを否定された気がして、寂しかった。

……つつきり泰生も悠生くんと同じ価値観を持っていると思っていたのに。

「もちろん、うちが持つてる店を全部そうしたいってわけじゃない。たとえばファストフードみたいに、取えて回転率だけに特化するべき形態の店舗もあるし」

「そうだね。お店によつてお客さまが望む形は違うし」

「うん。それを見極めて接客マニュアルも店舗ごとに組み直していくべきだと思ってる」
御曹司として幼いころから帝王学を叩き込まれているせい、泰生には常々仕事に対する強い熱意があり、彼の放つ言葉には自らが改革していきたいという前向きな意思が宿っている。

……この人が作るゼノフーズのお店がどう変わっていくのか、すごく楽しみに思えてきた。

「泰生とこういう真面目な話するの、あんまりなかったから新鮮」

「俺も」

私たちはどちらからともなく微笑み合った。

子どものころからの付き合いだし、悠生くんと仕事についての考え方が噛み合わないと自覚していたから、泰生ともこういう話をするのは避けていたかもしれない。でも。

「ね、泰生。迷惑じゃなかったらだけど……これからは仕事の相談とかしてもいい？」
 お店の規模や形態は違うけれど、泰生なら父や私の信念を理解してくれそうな感じがする。もちろん佐木さんや奥蘭さんも頼りにしているけれど、お店の外で忌憚きたんない意見を聞けるのは貴重だ。

「もちろんいいよ」

泰生は笑顔のまま、快くうなずいてくれた。

「ありがとうつ。じゃあさっそくだけど——」

これまで仕事の相談相手といえ、父の仕事を間近で見てきた佐木さんと奥蘭さんしかいなかった。思いがけず新しい味方ができてはしゃいでしまった私は、趣向を凝らしたおいしい料理を頂きつつ、お店のメニューやその価格設定、お客さまがよろこんでくれそうなサービスなど、最近「このままでいいのかな？」と迷っていた内容について、さっそく彼に意見を求めてみた。

泰生はそのひとつひとつに対して真剣に考えを述べてくれた。彼のアドバイスがもともとだと思ふ事柄もあれば、それでも持論を貫きたいと思う内容もあったけれど、意見を交換することで新たなアイデアが閃ひらめいたりして、得るものがたくさんある時間だった。

「……日和も筋金入りの仕事人間だな」

聞きたい話が一段落したころには、もうデセールを残すのみとなっていた。しゃべり

立ち読みサンプル はここまで

すぎて渴いた喉を、残り少ない赤ワインで潤しながら泰生が苦笑する。

「ごめん。お店のことになると、つい夢中になっちゃって」

きつと泰生は、こんな真面目な話をするためにここへ連れてきてくれたわけではなかっただろうに。突っ走って、訊きたいことを遠慮なく訊きすぎてしまったみたいだ。

私が反省して言うと、泰生は小さく首を横に振った。

「いや、日和らしいからいいよ。それに、日和にとって『フォルトーナ』はただの職場じゃないもんな」

「……うん」

脳裏に亡き両親の顔が浮かぶ。

ふたりが私に遺した大切な場所。だから私が守っていかなくやいけないのだ。ほかの誰でもない、娘の私が。

そんな気持ちが根底にあるから、仕事が絡むと一生懸命になりすぎてしまうくらいがある。

「お待たせしました」

そのとき、スタッフがデセールのプレートを持ってきてきて、私と泰生の前にそっと置いてくれる。

「……わあ」